

## 大麻文化科学考 (補遺)<sup>1-3)</sup>

— 日向の大麻 —

山本郁男\*, 井本真澄\*, 岩井勝正\*\*

A Study on the Culture and Sciences of the Cannabis and  
Marijuana (Appendix)<sup>1-3)</sup> - Cannabis in Hyuga

Ikkuo YAMAMOTO\*, Masumi IMOTO\* and Katsumasa IWAI\*\*

### Abstract

This paper deals with Cannabis which was produced in Hyuga (Miyazaki Prefecture). Although Cannabis, so called Marijuana, has been prohibited as one of abused drugs by Japanese Government in the present time, it was widely used as fiber materials until now. We examined the historical status, production, circumstances, and product materials for Cannabis fiber in Hyuga. As result, it was found that Hyuga areas also produced Cannabis fiber as famous economical goods through Edo, Meiji, Taisho and the middle of Showa periods in all districts of north Miyazaki, especially at Takachiho, Gokase and Hinokage. However, after World War II, only a few farmers in Hyuga cultivated until about fifty years ago these plants under the permission of Japanese Government according to Cannabis control law.

キーワード：大麻，繊維，日向，歴史的調査，大麻取締法

Key words: cannabis, fiber, Hyuga, historical examination, Cannabis control law

### 1. 日向の大麻

#### 1) はじめに

先に著者らは我が国における大麻（あさ、麻ともいう）の栽培状況につき特に北海道および北陸地方について詳細なる歴史的調査を行った結果、奈良時代より第二次世界大戦まで大麻は主要な繊維作物であり、日本各地で栽培されていたということが分かった。大麻の用途は時代とともに変遷はあるものの、布地、綱、糸、建築用シッ

クイスサ材、また大麻の種子は鳥の飼料として市販されている。しかし近時、化学繊維の出現により、全国的にも栽培農家はごく少数となっている。この現象に拍車をかけたのは、この大麻が強い幻覚作用を有する成分を含むため、戦後、「大麻取締法」という法律が米国を主とするGHQによって施行指導を受けたことによる。これら法的規正あるいは大麻の毒性および薬理作用に関しての詳細は既報<sup>4-6)</sup>あるいは著書<sup>7)</sup>を参照されたい。

本報では九州、日向（宮崎県）の大麻（あさ）の栽培、

\*九州保健福祉大学薬学部衛生薬学講座 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

Department of Hygienic Chemistry, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN

\*\*宮崎県薬剤師会薬事情報センター 〒880-0813宮崎県宮崎市丸島町2-5

Department of Drug Information, Miyazaki Pharmaceutical Association, 2-5 Marushima-cho, Miyazaki, Miyazaki 880-0813 JAPAN

生産、精製法など歴史的文献的調査ならび考察を行ったので報告する。

## 2) 大麻とは

大麻(麻, あさ)は学名*Cannabis sativa* Linne, アサ科(クワ科ではない)(*Cannabinaceae*あるいは*Cannabaceae*)に属する雌雄異株の一年生草である。原産地は中央アジアおよびバイカル地方とされる。約5000-10000年前、人類の移動とともにもたらされた繊維作物(茎)であると同時にその種子は古く中国では五穀の一つに数えられた救荒作物でもあった。高さ2-4m(写真1)、葉は鋸状をなす。



写真1 大麻草と著者

また上述のように葉および樹脂に強い薬理作用(幻覚、鎮痛、鎮静、催眠)を有する成分を含むことから薬物としても利用価値のある特異な植物である。事実、「インド大麻」は鎮静、催眠薬として日本薬局方の第5局(1951年)まで収載されていた。我が国には文献的にBC1000年頃に比較的幻覚成分含量の少ない繊維型、CBD種(これに対して含量の多い生理種を薬物型、THC種という)が大陸の北(シベリアなど)から持ち込まれ、広く上記の用途として分布、栽培された。特に栃木、茨城、福島、千葉、長野、新潟、石川、岐阜は有名である。著者らの調査では石川の能登地方は大麻の産地であり、江戸時代は年貢の中に数えられ、近江蚊帳の原料であると同時に能登上布の名をほしいままとした。北海道地方は戦前、そのロープが軍需用として汎用されたので、栽培が中止された今でも野生大麻として生育している。

現在、麻製品は神社などの祭礼、あるいは婚礼用としての用途が少ないながらもあり、特に栃木県鹿沼地方では今でも栽培生産されている。

## 3) 日向(宮崎)の大麻

周知のように日向は国生みの神話にもあるように天孫降臨、そして神武天皇と古事記の舞台となった歴史的場所と比定されており、神社仏閣も多い。従って、その神事に使用される麻(アサ)は必需品であり、その栽培は

当然と思われた。しかるに著者らの調査により現在は皆無であることが判明した。

しかしながら、大麻(麻)は木綿が普及するまで、この日向の地でも長い期間、重要な衣服の原料であった。この地方における大麻に関する最も古い文献は安元2年(1176)の「八幡宇佐宮符写」(奈多八幡縁起私記)<sup>8)</sup>にある。これには「宮符、日向庄符、可早 例進上御行幸会料色々雑物等事、御服綿拾九屯、例絹式拾一疋、手作布五拾四段、麻布六十五段、調布四拾段(後略)」とあり、行幸会料色々雑物として、麻布65段が献上され、また、貞治元年(1362)の「大光寺年貢日記」には<sup>9)</sup>「200文、麻を買う」との記録もみえる。このように古来、日向の地は麻の栽培が繁く行われたことは確実である。

宮崎県植物史によれば「大麻(アサ)」について別名アサオ、イチツ(都城)、オ(西白杵、都城)、オイヤサ、タイマなどの方言が知られ興味はつきない。<sup>10)</sup>

### 3)-1 大麻の作付面積および産出

明治初期に出された「日向地誌」<sup>11)</sup>にみえる大麻の生産量(明治5年頃)によると、大略高千穂町の向山村1500貫(5625kg)、押方村2400貫(9000kg)、三田井村4500貫(1万6875kg)、岩戸村2000貫(7500kg)、山裏村1300貫(4875kg)、下野村1000貫(3750kg)、上野村2400貫(9000kg)、田原村2000貫(7500kg)、五ヶ所村180貫(675kg)、川内村800貫(3000kg)、また五ヶ瀬町の三ヶ所村5000貫(1万8750kg)、鞍岡村5000貫(1万8750kg)、桑ノ内村1200貫(4500kg)は地域として最も大きい。さらに現在日之影町に属する七折村3000貫(1万1250kg)、分城村200貫(750kg)、岩井川村700貫(2625kg)となっている。(図1)(次頁3)

当時宮崎県内の全生産量は3万6805貫(13万8019kg)であったことから、この三町の合計は3万3180貫となり、全体の90.15%を占めることになる。それほど大麻の生産は県北が大部分であったことが分かる。

高千穂(岩戸、田原、上野を含む)地方における明治12年から昭和25年までの大麻の産出を、表1として次頁に示した。

また、宮崎県政80年史<sup>8)</sup>によると、大麻の県内における栽培地は西白杵郡(高千穂、日之影、五ヶ瀬)、東白杵郡(北方、北川、北浦、北郷、西郷、南郷)と東郷および門川町、諸塚および椎葉村それに都城辺りに限られていたようである。

また別の調査によると日向地方の作付面積は明治

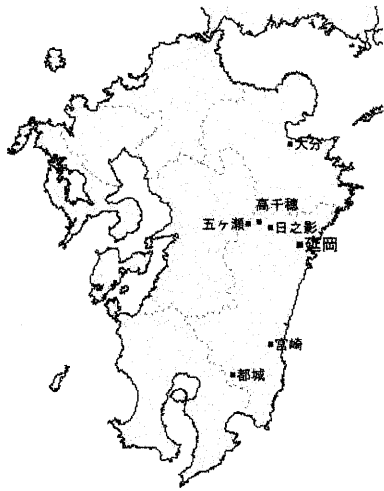


図1 九州地方の地図

17-21年の5カ年では568町であり、その80% (460町) は西臼杵郡が占めている。明治17年、時の明治政府農政局長より出された「大麻の産額、製法および販路の沿革」という調査報告によると、10万斤 (6万kg) 以上の県は栃木県を第1位とすると宮崎県は7位であり、その時の田辺県会 (現在の県知事) から岩山農政局長への報告書には「大麻の産出主なる場所は西臼杵郡を以て最とす」との記載がある。日向地誌によれば、当時の換金作物としてタバコ、茶、こうぞ、みつまた、こんにゃく

とともに大麻が上げられている。さらに藩政時代の上納 (年貢) はもっぱら麻布であったらしい。宮崎県農業実態調査報告書には「この時代の上納は女手により精製された麻布が主で、それを手末 (たなすえ) または田無の貢と称している」とある。これは著者らが既に報告している北陸の大麻<sup>2,7)</sup> とよく符合している。

麻糸は高機で布に織られ、タナシヤコギンなどの仕事着やカタビラなどに仕立てられた。また、ヒネリタビ、蚊帳、紐綱、袋類などが作られた。

3)-2 大麻の栽培と精製<sup>12)</sup>

既述のように大麻は雌雄異株であることから、雌雄によって各々名称が異なる。雌花のことを実麻 (ミオ) または苧麻 (ショウマ) という。これから種子ができる。一方、雄花は花麻 (ハナヲ) と言った。勿論どちらからも大麻はとれる。花麻は最も早く7月下旬~8月下旬に刈り取られるが種子取り用の実麻のみは一部分残し、10月下旬に採種した後に刈り取り、先の花麻と一緒にする。

大麻の種子まきは例年彼岸ごろ (北陸では燕が飛来する4月上旬)、収穫は土用の頃 (7月下旬から8月上旬) とされており、温暖な日向では北陸より若干早いようである。

高千穂町の「岩戸庄屋日記」<sup>13)</sup> に貴重な大麻栽培につ

(1) 明治期																							
地区別 年次	高千穂				岩戸				田原				上野				合計						
	作付面積	反収	収穫高	売上高	作付面積	反収	収穫高	売上高	作付面積	反収	収穫高	売上高	作付面積	反収	収穫高	売上高	作付面積	反収		収穫高	売上高		
12	町	友	8,400	円	町	友	3,300	円	町	友	2,980	円	町	友	3,400	円	町	友	18,080	円	日向地誌による		
39	大麻		151.010,000	15,133	87.8	4,990	4,382		45.5	7,700	3,127		101.5	7,000	7,106		385.8	7,711	29,748		伊勢観覧による		
	苧麻		18.4	15,000	2,760	24.7		3,218		32.6	14,240	4,648			2,638		75.7	17,523	13,265		伊勢観覧による		
42			151.3	9,000	13,617	21,787	128.0	3,906	5,000	2,400	73.0	3,151	2,300	2,300	110.0	6,091	6,700	6,700	462.3	5,974	27,617	33,187	伊勢観覧による
44			154.2	8,095	12,482	27,460	125.0	4,000	5,000	11,500	70.4	3,551	2,500	4,500	110.0	6,091	6,700	11,390	459.6	5,805	26,682	54,850	伊勢観覧による
(2) 大正期																							
2			153.0	6,390	9,776	15,642	100.4	4,831	4,850	8,730	70.0	3,857	2,700	4,860	96.6	6,795	6,568	8,500	420.0	5,689	23,894	37,732	伊勢観覧による
4			147.0	7,000	10,290	23,578	60.0	6,667	4,000	3,000	60.0	6,333	3,800	6,855	60.0	5,940	3,564	5,946	327.0	6,622	21,654	39,379	伊勢観覧による
6			148.8	11,211	16,666		60.0	4,860	2,916		70.0	6,400	4,480		62.2	5,941	3,695		341.0	8,140	27,757		伊勢観覧による
10																			304.0	21,390	65,026	62,668	県統計書による
(3) 昭和期																							
7																			132.7	19,411	25,758	15,745	
9																			116.0	18,122	21,022	19,852	
11																			107.7	19,556	21,062	23,884	
13																			109.7	22,310	24,474	44,296	
15																			157.1	26,460	41,570	141,220	
17																			137.5	22,188	30,509	137,292	
21																			60.1	19,068	11,460		
23																			57.7	16,276	9,391		
25																			61.3	13,620	8,349		

表1 大麻作付面積ならびに生産量<sup>12)</sup>

\* 県統計書 (昭和7-11年) には市郡別の数字のみ記載してあり町村別は不詳である。他の資料を参考に県集計と各郡の作付面積を比較すると、本郡割合約85%前後と推定されるので郡対町村割合を他作物の作付状況からみて65%で算出した。

尚昭和13, 15, 17年は県作付面積の郡対比92.8%となり、昭和21, 23, 25年は西臼杵郡のみの作付なので郡対町村割合を65%にした。

いての記録があるので次に記す。寛保元年（1741）6月4日雨天。「今晚大風雨、所々小崩等及麻しらけ殊之外痛」。また、宝暦三年（1753）5月18日大風雨、「村方麻芋大風に悉吹潰す」。さらに宝暦四年（1754）4月24日、大風雨、「大小麦、麻芋大痛、而悉吹潰す」と麻が生育中暴風雨に弱いことを示している。これは茎が風に吹かれて外皮が互いに傷つけられ、長い繊維が得られにくくなるからである。

採取された大麻は、乾燥（日干し）したものを住居の屋根裏、あるいは厩舎の2階等に一旦貯蔵しておき、日が経った冬の農閑期に取り出し流水あるいは溜め水に1週間から10日間浸しておき、茎の表皮が柔らかくなったところで引き上げ、1本1本表皮（粗繊維）を丁寧に剥ぎ取る（これを俗にオヘギという）。これらを集め、さらに大釜に入れて灰汁を加えて長時間（5-6時間）煮沸。繊維をほぐす。この後、小川にまたぐように小屋を建て（この小屋を俗にオコギ小屋という）。その中で長さ30cmほどの小竹を2本、両端をシロ皮の紐でくくったもの（これを俗にオコギダケまたはオコギバシという）に粗繊維をかけ、小川の流れの中で薄皮をこぎ落とす。



写真4 オヘギ（剥皮のこと）



写真5 オコギ



写真2 麻畑の麻

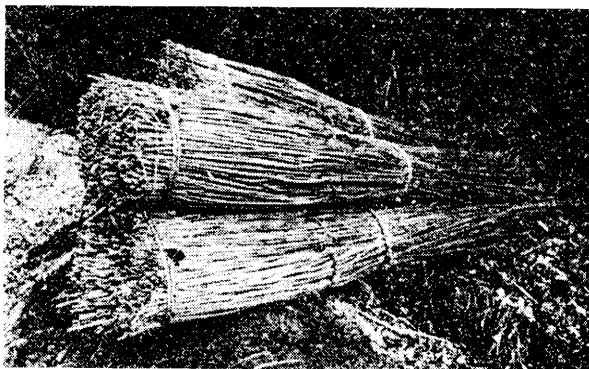


写真3 刈り取った麻を日乾して束ねたもの



写真6 麻芋こぎ小屋

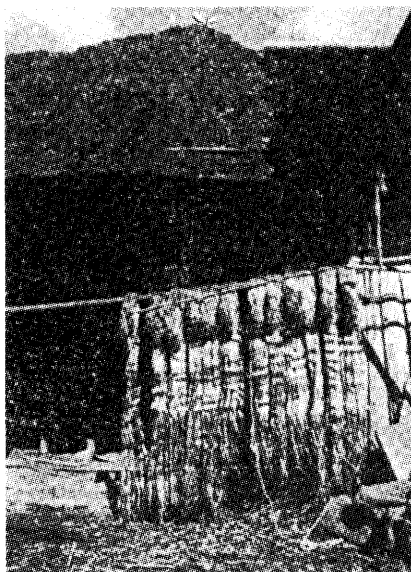


写真7 精製された麻

つまり麻を水流に漬す。これを行った後に竹竿につるして乾燥させる。これが最終製品の精麻である。この作業は婦女子に課せられた労働であった。オコギ小屋は普通2-8名の共同作業場であり、高千穂町内では一時は100ヶ所以上数えたらしい。その繁盛振りがうかがえる。また精製する際にでる副産物ともいえるオガス（繊維が粗悪で麻商人に渡せないもの）はそこに働く婦女子の個人収入（これを俗にマツボリと言う）として与えられた。この行程は植付け、とりあげ、皮はぎ、繊維とり、そして糸取りに分けられる。こうして大麻は精製された。

江戸時代は麻緒（アサオ）は藩の専売事業でもあり、自由に他国の商人に売ることは堅く禁じられていた。藩発行の鑑札を持つ仲買人のみに限られており、税は現品納めであった。明治以降は自由販売となったため、豊後（現在の大分県）あたりから仲売人（商人）が木綿の反物を持参して渡し、代金は秋の麻の収穫時に麻の現物で受け取るという商法が行われたらしい。因みにこの頃、延岡藩からの大阪地方への出荷品のうち、麻苧（マチョ）500貫目との記載がある。

大麻栽培については明治から大正初期までは畑作面積の約30%程度であったが、水稻（開田）の拡大とともに、年々大麻の栽培も減少していった。大正後期から昭和に至り、南方（東南アジア）よりマニラ麻が自由に輸入されるようになったこともあり減少せざるを得なかった。しかし、大麻の葉は有機質に富むことから、地力増進のために農家では毎年作付されていたようである。

麻汁は播磨風土記<sup>1,2,4)</sup>には毒性があることが書かれているが、幸にも日本人は麻の葉を乾燥喫煙するという風

習はここでもなかったようである。

日向地方の葉草についての記述で有名な賀来飛霞の「高千穂採葉記」<sup>14)</sup>にも麻のことが出ている。また、東臼杵郡諸塚村史には大麻の栽培および大麻製品について興味ある記録があるが、紙面の都合上次の機会にゆずりたい。

## 謝 辞

本研究は北陸大学薬学部 渡辺和人教授、木村敏行助教授、舟橋達也および山折 大助手らによって続行されている「大麻成分の分子毒性学的研究」の一環として書かれているものである。ここに深く感謝する。

また、本論文中の写真、資料の転載につき快く承諾いただいた宮崎県西臼杵郡高千穂町役場企画情報課長 佐藤久生氏に深謝する。

## 引用・参考文献

- 1 山本郁男：大麻文化科学考（その1）、大麻の文化、北陸大学紀要 14：1-15, 1990.
- 2 山本郁男：大麻文化科学考（その2）、続大麻の文化、北陸大学紀要 15：1-20, 1991.
- 3 山本郁男：大麻文化科学考（その7）、大麻の栽培、育種、北陸大学紀要 20：9-25, 1996.
- 4 山本郁男：大麻文化科学考（その3）、大麻と法律、北陸大学紀要 16：1-20, 1992.
- 5 山本郁男：大麻文化科学考（その11）、大麻の毒性および薬理作用、北陸大学紀要 24：1-23, 2000.
- 6 山本郁男：大麻の幻覚作用、日本薬剤師会誌、37：1061-1071, 1985.
- 7 山本郁男：大麻の文化と科学 —この乱用薬物を考える—、廣川書店、東京、2001.
- 8 宮崎県史 資料編古代 奈多八幡縁起私記 宮崎県編、1991.
- 9 宮崎県史 資料編中世 I 大光寺文書 宮崎県編 1994.
- 10 平田正一：宮崎県植物誌、県内植物方言名、1984.
- 11 日向地誌、日向市役所総務課、甲斐 勝編 1973.
- 12 高千穂町史 p 482-487 宮崎県高千穂町編 1973.
- 13 宮崎県史 資料編民俗 I 岩戸庄屋日記 p 900, 1992.
- 14 賀来飛霞：高千穂採葉記、弘化二年、1845.